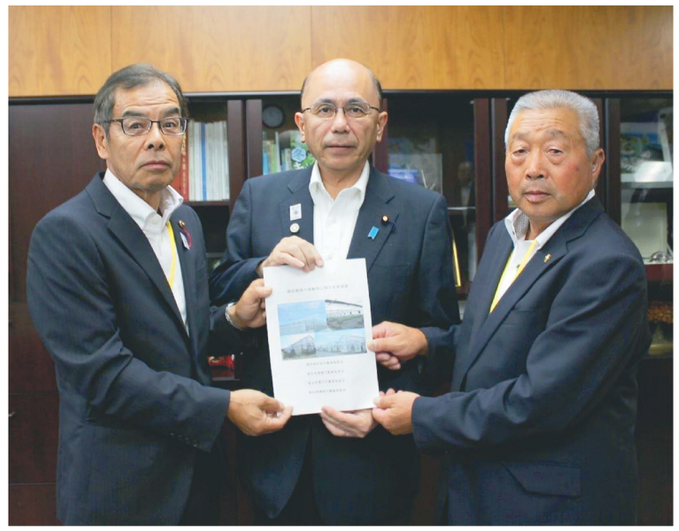
国に園芸施設の承継対策を要請

愛知 東三河4農業委員会

根本副大臣へ要望書手渡す


左から田原市農業委員会の山本会長、根本農水副大臣、豊橋市農業委員会の水野会長

【愛知】田原市、豊橋市、豊川市、蒲郡市の農業委員会は連名で「園芸施設の承継等に関する要望書」を作成。7月17日に田原市の山本貢司会長と豊橋市の水野敏久会長が根本幸典農林水産副大臣へ手渡して要請した。

4農委会が連名で国に要請するのは初めて。4市がある東三河地域は輪菊やキャベツをはじめ多くの品目で全国有数の産地を形成しているが、担い手の高齢化や生産資材価格の高騰により離農する農業者が増加し、使用可能な園芸施設が遊休化する事例が増えている。

遊休施設を新規就農者などが改修して利用する際に、国の補助金を利用するには、所有権移転が条件となる場合があり、施設の貸借では活用できない事例が生じている。

このため、①改修・再整備のための補助について、所有権移転を伴わなくても一定期間の貸借契約があれば補助対象とすること②遊休化が懸念される園芸施設の再活用を促進する補助の拡充を図ること③老朽化等により再活用が困難な園芸施設に対して解体費の補助を新設すること――を要請した。

根本副大臣は「要望があった3案件について内容を確認し、調整するよう指示するとともに、必要に応じて現地などに赴くようにする」などと応じた。

新ブランド米でおにぎりコンテスト

岐阜 「清流のめぐみ」知名度向上へ

9月11日までレシピ募集

【岐阜】県は、県ブランド米「清流のめぐみ」の認知度を高め消費拡大につなげようと、初の試みとなる「清流のめぐみ 岐阜おにぎりコンテスト」を実施中だ。多くの人に清流のめぐみの魅力を知ってもらおうと、「ごはんの時間が楽しみになるおにぎり」をテーマとし、レシピは県内在住者・通学通勤者を対象に9月11日まで募集する。

清流のめぐみは、コシヒカリ並みの品質・食味で、高温障害に強く倒伏しにくい品種として2022年に品種登録され、今年4月に県奨励品種に登録された。猛暑に対応できる品種として生産者からも期待が寄せられ、県内約30経営体が生産している。





㊤参加した岐阜農林の生徒、㊦販売を担うギフライスの恩田社長

7月16日に岐阜農林高校でキックオフイベントが開かれ、同校の生徒40人が清流のめぐみとコシヒカリで塩むすびを作り食べ比べた。生徒たちは、食感や味、香りなどの違いを確かめながらどんな具材が合うかアイデアを膨らませていた。

販売を担う㈱ギフライスの恩田喜弘社長は「皆さんの感想を励みに、清流のめぐみを全国へ届けていきたい」と意気込みを語った。

問い合わせは、県農政部農産園芸課水田振興係（☎058・272・8439）まで。

地場産野菜で料理教室

石川・野々市市農業委員会

消費拡大進め農委活動PR


農業委員とサマーカレーを楽しむ参加者

【石川】野々市市農業委員会（伊藤正浩会長）は7月4日、同市の「にぎわいの里のいちカミーノ」で市民向けの料理教室を開いた。市の広報紙やLINEなどから申し込みがあった18人と農業委員合わせて27人が参加した。

この取り組みは、地元農産物の消費拡大を進める目的のほか、農業委員会の周知活動の一環として企画された。調理に先立ち、講師を務めた江藤万紀子さん（7月まで農業委員）は、「野々市にはおいしい野菜がたくさんある。今日はたっぷりと使って魅力を伝えたい」とあいさつ。参加者は江藤さんが用意した夏野菜を使い、サマーカレーやたまねぎサラダ、青しそジュース作りに挑戦した。

出来上がった料理を味わった参加者は「たまねぎが甘くておいしい」「夏野菜の味がしっかり楽しめる」と笑顔を見せた。佛田利弘会長（当時）は「取り組みを通じ、市民の皆さんに農業委員会の役割を知ってもらう良い機会になった」と手応えを強調。市街化が進む同地域だが、農業委員会では今後も農業の大切さを発信していく方針だ。

外来植物駆除めざし草刈り

長野・南相木村農業委員会

「農地再生の第一歩に」

【長野】南相木村農業委員会（中田千幸会長）はこのほど、農地の適正な維持管理と外来植物の駆除を目的とした草刈り作業を村内の農地で実施した。

近年、村内では本来その地域に自生していなかったオオブタクサなどの外来植物が増殖し深刻な問題となっている。外来種は人間の活動などによって外部から持ち込まれたもので、地域の生態系や農作物の生育に大きな影響を与えている。こうした状況を重く見た農業委員会は、農村環境の保全と農作物の保護に向けた対策として、農業委員による草刈機を用いた駆除の実施に踏み切った。


村内の農地で行われた草刈り作業

参加した農業委員からは、「外来植物の増殖は、地域の農業や生態系を脅かす喫緊の課題だ。外来植物問題の解決が農地再生の第一歩になれば」と期待を寄せる声が聞かれた。

就農セミナー&相談会が熱気

兵庫県 就農希望者100人超来場

【兵庫】県とひょうご農林機構、ひょうご就農支援センター、JA兵庫中央会は6月21日、就農希望者向けセミナー&相談会「ひょうごで就農」を開催した。

会場の神戸国際会館セミナーハウスには、10人の就農希望者が来場し、各市町や農業法人などの出展ブースを訪れて熱心に相談していた。神戸市から来た50代の男性は「農業をやりたいと思っている。就農希望地のリアルな情報が得られ、とても参考になった」と話す。

セミナーでは、先輩就農者からの発表があり、養父市で高原野菜を栽培する鮑昌成（ほうまさなり）さん（45）、神戸市西区でハウストマトなどに取り組む工藤菜央（なお）さん（38）、神戸市北区でハウスイチゴを栽培する豊藏玄（とよくらげん）さん（63）が、自らの体験を披露。就農の動機や経営状況などを語った。


熱気あふれる相談会場

発表者は「自ら積極的に動くことが必要で、がんばれば必ず助けてくれる人が現れる」など、参加者に熱いエールを送っていた。

和歌山をコーヒー豆の産地に

大阪から移住、ゼロからの挑戦

日高川町 道仙信也さん


「春には雪が降り積もったような花を咲かせます」と話す道仙さん

インスタグラムの二次元コード

【和歌山】「夜勤中に飲んでいた缶コーヒーを見て、国産のコーヒーってあるのかな、と思ったのがきっかけですね」と笑顔で話す道仙信也（どうせんしんや）さん（41）。大阪で看護師として勤務していたが、日高川町へ移住したのち、和歌山県で2軒目となるコーヒー豆の生産農家になった。

県内での実例がほとんど無いコーヒー豆農家としてのゼロからのスタートは、苦難の連続だった。融資や支援の相談に行くと、厳しい意見を返されることがあり、何度もくじけそうになった。

「その厳しい意見があったからこそ、物ごとに向き合い着実に一歩ずつ覚悟を持ってここまで来ることができた」と道仙さんは語る。

約150年前に始まったとされる国産コーヒー豆の栽培。その生産量は10㌧程度で、輸入量約36万㌧の1％にも満たない。そのような状況の中、和歌山県をコーヒー豆の産地にしたいという道仙さんの挑戦は始まったばかりだ。

新品種で丹後梨のシリーズ展開めざす

京都府農林水産技術センター丹後農業研究所


本年度に品種登録出願をめざす新系統のナシ

【京都】丹後地域はナシが中心の果樹産地で、栽培面積の76％を「二十世紀」系品種と「新興」が占める。

こうした状況を踏まえ、丹後農業研究所では、今後の丹後梨のシリーズ展開や作業繁忙期のピーク平準化に向けて、新たな品種の開発を進めている。

現在、「二十世紀」と出荷時期が異なる早生のオリジナル系統を選抜し、品種登録の出願に必要な特性（樹体生育、開花、果実特性など）のデータ収集と安定生産の技術開発に取り組んでいる。

本年度中に出願を予定。新品種として登録されれば、丹後梨の有利販売や長期出荷が可能になると期待されている。

中日本版

各地の話題